

# 黒人研究の会会報

第62号 2005年12月31日

## 例会発表要旨

7月例会 2005年7月9日(土)キャンパスプラザ京都

The Relationship between Father and Daughters in *By the Light of My Father's Smile*

光森 幸子

この物語の根底にはAlice Walker自身が理想とする一連の世界観が流れている。それは人種間・男女間に全く優劣のない考え方であり、人間の尊厳は誰も奪えないという信念である。彼女は世界の民族の持つ文化が自分達の基準に達しているのかを調査する西欧人の傲慢な態度を許さない。それはIreneが語る言葉から読み取れる。

I think it is ridiculous and ultimately insulting to study people, said Irene. I think you would only need to study other human beings if you were worried you were not human yourself.

西欧人を皮肉るこの言葉は、彼等が至上最高で普遍のものだと思っている文化や制度が、実は世界的基準で見ると特殊なものであり、そこからの狭い視野で他国や他民族を判断する限り世界の人々と連帯することは決してできないという意味を持つ。WalkerはMundo族の持つ世界観のなかに父・娘、男女の関係を描くことからこの点に切り込んでいる。

9月例会 2005年9月24日(土)神戸市外国語大学

「アイデンティティの攪乱」 — ハナ・クラフツからトウェインまで

風呂本 惇子

混血の女性奴隷が主家の子とわが子を入れ替える話は、Neither Black Nor White (1997) の著者Werner Sollors によれば、19世紀アメリカ小説においてそれほど珍しいとは言えず、1840年代に一つ、50年代に四つ、60、70、80、90年代に各一つ現れている。2001年に発掘され、2002年に作者の身元不確定なまま刊行された Bondwoman's Narrative (Hanna Crafts) も、1850年代の作品と見なされるので、このリストに新たに加えてよいだろう。発表の趣旨は、この小説と、A Romance of the Republic (Lydia Maria Child, 1867) および Puddun' head Wilson (Mark Twain, 1894) において、時代、人種、ジェンダーの差が同一のモチーフの扱いにどんな違いを生じているのか、の比較検討である。なお、この三作品には、人種と性の二重変装という、アイデンティティに関わるもう一つの共通モチーフが見出される。二重変装は実在のエレン・クラフトの逃亡以来、50～60年代の奴隷体験記型小説(たとえば『アンクル・トムの小屋』、『クローテル』、『ある奴隷娘の人生におけるできごと』など)の構成要素にすらなっていた。しかし、奴隷の逃亡のために受け継がれてきた命がけの二重変装が、トウェインの小説では犯罪のために使われている。これが1890年代の反動的な風潮の中でどのような意味をもったか、という点も再考に値すると考える。

10月例会 2005年10月22日(土)キャンパスプラザ京都

シンポジウム <ハーストン、ウォーカー、モリスンをつなぐ点と線:身体・記憶>

コーディネーター : 松本 昇

ジェンダーとの関係のせい、黒人を他者と見なした場合の他者性の究明のせい、それとも複雑な現代社会で人間が世界観を構築する際の拠点となるせい、

最近、様々な分野で様々な視点から身体が考察されている。ところが、そうした考察は白人による身体論がほとんどであり、黒人の立場に立った黒人に関する本格的な身体論がない。そこで今回は連続シンポの締めくくりとして、ゾラ・ニール・ハーストン、アリス・ウォーカー、トニ・モリスンの作品で描写された身体を、記憶をキーワードにして考え、3人の作家に見られる共通項と差異を顕在化したい。

### ① 消された女—黒人表象と黒人フォークロアにみるハーストンの身体論

岩瀬 由佳

文化人類学者、作家として数々の業績を残しながら、ゾラ・ニール・ハーストンが1970年代に至るまで社会から全くといっていいほどに忘れ去られていたその理由のひとつとして、彼女が提示した新しい黒人像が、当時の彼女を取り巻く主流派(権力を握る白人側、あるいは黒人知識層)が求める黒人像と大きくズレていたからではないかという論から展開した。彼女が収集した黒人フォークロアにおける「語り」が、文字通り身振り手振りを加えながらパフォーマンスする能動的「行動」であり、伝統の上にまた新たな切り口やバリエーションを重ねていくことによって生まれる黒人たちの言語活動の豊かさに裏打ちされた「身体表現」のひとつであること、また白人側による固定された「黒人のステレオタイプ」を微妙にずらしながら、常に即興的に書き換えていける独創性、不利な状況を「笑い」に変換して切りぬける黒人の精神の健全さを見出せることから、ハーストンの身体論とは、受け身の媒体ではなく、活動する身体であり、「語ること」によって、あるいは「行動すること」によって、他者からの表象を自らパフォーマンスに次々と書き換えていく創造性と自由な空間を生み出す能動的かつ自律的媒体であると結論づけた。

② “Lay down. Spread. Suck on my tongue.” 陵辱される「身体」からの解放を求めて —By the Light of My Father’s Smile を中心に

口 瑞穂

タイトルは短編集The Way Forward Is with a Broken Heart (2000)の中の短編“Big Sister, Little Sister”の一節から。これは奴隷制の頃白人の主人にレイプされた経験を女たちが次世代へ語り継ぐ話である。奴隷制の「身体」の記憶、トラウマが現代に生きる黒人女性にも影響を及ぼすというこの話は、小説By the Lightの現代の黒人姉妹マグダレーナとスザンナが父親からセクシュアリティを抑圧され、心も

「身体」も傷つき苦悩するという話にも通じる。黒人の父親は白人的な「家父長的な」価値観を無意識のうちに持ち、娘の「身体」を支配しようとする。身体の「陵辱」というテーマの変奏はポーリーンやイレーネという他の登場人物にも見られる。また「記憶」はトラウマになりうるが、その一方で「再生」「和解」へとつながる可能性もある。父親は死者となって「記憶」を他者と語り合ううちに自らの過ちに気づき、娘のことを理解し、娘たちと和解する。スザンナも友人たちとそれぞれの過去の「記憶」、物語を語り合うなかで、さまざまな文化の中での女性たちの陵辱される「身体」の歴史を知り、cross-cultural, cross-generationalな視野の中で、自分の置かれている状態を理解し、新たな成長を遂げることになる

### ③ 『パラダイス』(1998)—消えた死体、そして女性の身体と生の過剰な痕跡

三石 庸子

モリスンにおける身体を、癒しとの関わりにおいて考察し、作品は『パラダイス』を取りあげる。モリスンにおいて、身体的癒しは重要な位置をしめる。Sulaの葬式の中で、身を揺らし、踊り、声を張り上げる女性たちは、身体的に死を悼み、神の意志を受け入れようとしている。また、Belovedで、セッサが過去のトラウマを乗り越えるためには、死の境界を越えて現われる身体であるビラヴィドの存在が必要であった。そうした死の境界を越えた身体の癒しが、『パラダイス』にも描かれる。修道院の女たちは、殺されて、生き返ったのではなく、初めから死んでいたと解釈する説が可能なほど、生と死の境界が曖昧な一方、修道院は女性の身体の過剰な痕跡の場として、セックス、妊娠、出産、看病、手仕事、料理、共同体、型取りなどのエピソードに満ち、女性たちは、身体を通して癒されていく。soul/flesh, life/death, spirit/bodyといった二分はできず、身体はなかったとしても、その痕跡は強烈な存在感をもっており、記憶としては実在したことと変わらない。

コメント 分断された女の帝国と身体

—ブラック・フェミニズム・幻肢(phantom limb)・国家的記憶喪失からの回復

司会： 中地 幸

1980年代から90年代にかけて最も熱い批評理論とされた身体論は、フェミニズム理論、クイア理論の発展と深く関わっている。Judith Butlerのパフォーマティヴィ

ティ理論が「統合された身体」へ挑戦する「身体」の解体の理論であったことは言うまでもないが、サイボーグ・フェミニズムで有名なDonna Harawayもまた「部分」であり「逸脱」としてのサイボーグの身体について語り、父権社会の枠の中に閉じ込められようとする身体からの逃走を呼びかけていた。しかし、このような理論は身体を脱身体化あるいは脱性化するものとして一部のフェミニストから批判を受けもした。というのも、性を身体から遊離させる理論は「女」という問題に取り組もうとするフェミニズム理論にとって極めて危険であるからである。Volatile Body(1994)においてElizabeth Groszは身体には性が常に介在することを強調したが、これは身体を脱身体化するように見えたポストモダン・フェミニズム理論への警告であったといえよう。しかし一方でGroszの理論が「性」を二元論的な形に収斂させ固定化してしまうという欠点を持っていたことは否めない。

こうしてフェミニズムが有機体としての身体と言説回路を通して構築あるいは攪乱される身体との間の遡行を繰り返している間、アフリカ系アメリカ人研究者たちは「身体」そのものの意味を歴史的な地平から再検討し、別の眼差しから身体論を深化・進化させていた。とりわけ、ブラック・フェミニストたちは白人女性の身体と黒人女性の身体は歴史的に別の次元に構築されたことに注目し理論を展開していく。Hortense J. Spillersはアフリカ系アメリカ人女性はアングロサクソン系アメリカ人女性たちとは別のアングルから歴史的なステージに入ったと語り、そのジェンダーとセクシュアリティの形成における歴史的差異を明確にした。Spillersは奴隷制における黒人の身体はBodyではなくFleshにすぎなかったと議論する。この議論は奴隷制において脱主体化された主体と身体の関係性を考察するものであるが、黒人の「身体」を回復させるための批評家による戦いとして高く評価されるべきであろう。

一方、80年代、90年代を通して、多くのアフリカ系アメリカ人女性作家たちは、「過去」を見つめ、母、祖母、曾祖母、そして先祖の声を再生しようと試みる。また、この時期は、忘れられていた過去のアフリカ系アメリカ人女性作家の発掘も盛んに行われるが、このような発掘は、失われた声の再生のための作業であり、アメリカ文学の記憶回復の作業であったといえるであろう。このような意味で、失われた身体の記憶を取り戻す作業とは、いわば国家的記憶喪失から国家文学再生への道筋となったとも考えられる。この中で、失っても存在するかのよう痛む「幻肢」のように、奴隷制において陵辱された黒人女性の身体の傷は歴史的なトラウマとして、アフリカ系アメリカ人女性の集団的記憶の中に引き継がれていく様は注目に値するであろう。Zora Neal HurstonやAlice Walkerが描くDV(家庭内暴力)は、黒人コミュニティの意識に刻まれた精神的外傷といえる。またToni MorrisonのBelovedもこの観点から考えることができる。作家たちは、忌まわしい記憶を呼び起こし、それを「語ること」を

通して、傷つけられた肉体と精神を回復していこうと試みているのである。Hazel V. Carbyは身体が陵辱された過去の地点に戻らなくては、黒人女性の身体の再生はありえないと述べているが、「身体」と「記憶」ははアフリカ系アメリカ人女性文学を読む解くための重要な鍵となるといえるであろう。

11月例会 2005年11月26日(土)大阪工業大学

① 英国警察に見る制度的人種差別

西牟田 裕美子

1999年に起こった「スティーブン・ローレンス事件」をきっかけにイギリスでは警察内にはびこる人種的偏見と差別行動が公になり「制度的人種差別」について様々な議論がされ対策が講じられてきた。ところが昨年(2005年)7月7日にロンドンでおきた同時爆破テロ事件、テロに無関係とされたブラジル人青年ジャン・シャルル・デメネゼスが警官に射殺され、日本の新聞にも大きく「移民社会」「根強い差別残る」と取り上げられるようになった。

本稿では警察、刑務所、精神病棟等で軟禁、監禁中に謎の死を遂げた黒人又は非白人(「Black Deaths in Custody」)と1980年代のブリックストン暴動事件(Brixton riot)を引き起こしたとされいったんは影を潜めたが、今世紀に入ってまた復活し非白人たちの市民生活を圧迫している「ストップアンドサーチポリシー」「SUS LAW」を紹介し、現代イギリス社会の人種主義の1側面について報告する。

② 大英帝国のエチオピアへの眼差し—『英国議会資料』編纂作業にもとづいて

古川 哲史

本発表では、国立民族学博物館所蔵の『英国議会資料』の紹介と、現在取り組んでいる『英国議会資料・資料集エチオピア篇』編纂作業の状況、そして執筆中の1860年代のイギリス—エチオピア関係の論文の概要を述べた。

1998年に京セラから国立民族学博物館・地域研究企画交流センターに、1801年から1986年までの13000巻におよぶ膨大な英国議会資料のセットが寄贈された。これは英国旧商務省所蔵のものが売りに出され日本に渡ってきたものであり、本国の議会や大英図書館、オックスフォード大学などにある版よりも欠本や脱落の少ない、世界でもっとも完全なセットと言われる。

『英国議会資料』は議事録だけでなく、さまざまな文書からなり、アフリカやインドなどの植民地をはじめ、日本に関する記述・報告書も数多い。イギリスの立場からではあるが、ほかの資料では見られない現地の貴重な情報が豊富に含まれている。大英帝国の植民地支配や経済戦略などは、文字通り相手を「書くこと、記述することから始まる」と思わせる。

発表者はこの膨大な議会資料のなかで、エチオピアに関する文書を集めた資料集を編纂中である。また、その資料を利用して、1860年代のイギリスとエチオピア、とりわけ1867-68年に両国間でかわされた外交交渉や戦争に焦点をあてた論文を執筆中である。論文では、当時のエチオピアがいかに国内の権力争いとヨーロッパ帝国主義に翻弄されていたか、そしていかにヨーロッパ諸国を政治的に利用しようとしていたかを論じたい。

12月例会 2005年12月10日(土)キャンパスプラザ京都

2005年夏日米交流基金招聘ブラックスタディーズ研究者交流に関する報告

山

本 伸・中地 幸

去る2005年7月13日(水)から30日(土)まで、日米交流基金の招きにより黒人研究会のメンバー(日本より4名、現地より2名)がアメリカのブラックスタディーズ研究者らとの交流、懇談を行う機会を得た。参加者は木内、西本、中地、山本の各氏、加えてアメリカで在外研究中および留学中の森、坂下両氏が現地で加わった。主な訪問地は順に、シンシナティ(オハイオ)、テレホート(インディアナ)、ワシントン、ニューヨークで、シンシナティでは第4回モリスン学会に参加、地下鉄道博物館等を見学し、招聘の立役者Keith Byerman教授の本拠地テレホートでは彼が教鞭を取るインディアナ州立大にCLA(College Language Association)、NAAAS(National Association of African American Studies)、ASALH(The Association for the Study of

African American Life and History)、NCBS(National Council for Black Studies)の黒人研究者組織の各代表が一同に会した。日本の組織についてはJBSAとMESAについての紹介を行い、互いにブラックスタディーズという枠組みの中での現状と今後の相互協力の可能性等について懇談を図った。JBSAとしても、今後国際的な活動を展開していく上でのさらなる大きな一歩となったことと実感する。さらにワシントンでは議会図書館やハワード大学、NYではシヨンバーグセンター等を訪問し、この有意義な18日間の旅は終わったのであった。

(文責 山本)

## 会員からの投稿

77歳で地球一周の船旅に出て—私の〈ピースボート〉体験

古川  
博巳

私は2005年2月3日神戸を出港、5月18日同地に帰着した第48回ピースボートによる西回り地球一周105日間の船旅に参加した。主催団体の「ピースボート」とは、国連との協議資格をもち平和のため国際交流の船旅を企画する非営利団体NGO(非政府組織)である。

阪神淡路大震災のときにはフェリーで支援物資を運んだり、生活情報かわら版「デイリー・ニーズ」を刊行するなど被災者救援活動にあたった。私の下船後に出港した第49回航海では、過去最多の約千人が乗船し、同NGOが集めた中古の車いす67台を、「水先案内」として乗り組んだバグダッド出身の女性医師に托してイラクに搬送した。なお、昨年6月の〈黒人研究会・創立50周年記念大会〉に招いたアレン・ネルソン氏もベトナムまで同行した。

第48回の乗客は約900人。最高齢者は91歳の元・海軍参謀、最年少者は16歳の少年であった。ボランティア活動や交流で単位がもらえる大学生や高校生もいた。その他、今回招待の韓国人大学生4名、英語・スペイン語の教授陣、CC(コミュニケーション・コーディネーター)と呼ばれる通訳職などに計30名近くの外国籍の人たちがいた。くわえて、船長以下約330名のクルーの国籍は30数カ国からなり、国際色ゆたかだった。

この船旅に私が参加したのは、ライフワークの仕事が一段落ついたということと、以前から関心があったこの組織の活動を実際に知り、体験したい想いとがあった。幼少から病気がちの上、余生いくらもなし。生身の体がどう転ぼうと、この際に、との



決意だった。とはいえ気がかりは治療中の肝炎や前立腺肥大、健康を気遣う家族の大反対、75歳以上は医師の診断書を付した所見が必要という点だった。昨秋、こわごわ主治医に希望を伝え、所定の検査と所見を求める書類を見せて相談した。検査終了後、主治医から食事・運動など船中生活のアドバイスにくわえて「無理のないよう楽しんできては」とのお達しをもらう。このお墨付きで、家族からの風当たりは若干やわらいだ。

ところで、三カ月半に及ぶ船中での体調はどうだったのか先回りして知らせておこう。冷房のきき過ぎた大ホールでの夕食後の講座で、うたた寝をした不注意から、四月上旬、南半球の太平洋上で二週間余り咳・喀痰をともなう風邪にかかり、数日は下痢もあり、船医の処置をうけることとなった。下痢は個人差があるが、船内の風邪は全員おなじ症状とのことだった。その頃、上顎の歯三本を留めていたブリッジが脱落するということがあった。「泣き面にハチ」とはこのことか。朝食は和食もあり、おかゆに切り換えたが、そのため4キロ近く体重が減った。下船後4カ月経った現在、やっと回復したところである。幸い私は船酔いはしなかったが、寄港地でも「陸

おか

酔い」がして、帰国後もまだふらつく感がある。

船上ではいろいろな催しがあり、船長主催の歓迎パーティーはじめ、デッキでの洋上運動会、乗客の自主企画による講座や趣味の同好会も多い。しかし、今年は戦後60年、憲法9条を守る会や、戦争体験を次の世代にどう伝えるかが、集会での大きな課題だった。

航路は東南アジアからインド洋で赤道を越えアフリカのケニア、紅海沿岸のエリトリアへ。そして、スエズ運河を通過してエジプト、リビアから地中海を縦断してイタリア、南フランスからジブラルタル海峡を抜け大西洋へ。モロッコ沖のカナリア諸島から大西洋を横断してカリブ海域のジャマイカへ。パナマ運河通過後はペルー、チリと南下し、南太平洋ではイースター島、タヒチから最後の寄港地ハワイへと北上するというものだった。

寄港地では自由行動という選択肢もあるが、オプション・ツアーには観光・見聞・交流の三分野がある。私の場合は、家族に心配をかけない配慮から、「転地療養」の趣旨に徹し、主として「ゆったり」を付したコースを選んだ。

船上での私の一日は、朝6時ごろ私のキャビンとおなじ6階にあるレセプションへ船内新聞「よつば」を取りにいくことから始まる。A3裏表の同紙には、あらたに乗船の水先案内のことやスタッフ、乗客の紹介などのほか、見開きページに当日の多彩な企画が朝から夜の24時までぎっしり書き込まれている。時差の発生、マラリア薬の服用、検温の指示、売店からのお知らせ等々も記され、英文版もある。ざっと目を

通し、フェルトペンで傍線を引いたり、時間ごとの企画面に囲みを付し、その日の予定を決める。

体調を崩した2週間余をのぞき、私は船の後尾8階屋上での6時15分から30分までのラジオ体操、その後7時までの太極拳の練習に参加した。太極拳は、最後に昇る朝日に向かって手を伸ばし、「ワッ」という掛け声で練習が終わる。

その後、すぐ階下にある、「ヨット・クラブ」という名の展望のきくビュッフェに降りていく。いつの頃からか、ここでレモン・ティーとヨーグルトをとり、その後、4階中ほどにある大食堂「トパーズ・ルーム」に朝食を取りに行くという習慣がついてしまった。朝食は和食が主体のバイキング方式で、早ければときおりシラス干しに大根おろし、とろろもあった。メニューは早朝、船内の数カ所に貼り出されるが、ふだん大食堂での昼食と夕食はコースで提供される。ヨット・クラブは三食ともセルフ・サービスなので、打ち合わせを兼ねての食事とか、食事前後に出席したい催しがあるときには重宝した。

体調不良の期間は、ベッドに横になり、キャビンTVで、青年医師の世界ひとり旅とか、洋画、韓国映画を堪能したが、寄航地紹介の集会は欠かさず出席した。海外青年協力隊やJICAの活動についての「国際協力講座」にも毎回出席した。この講座で、協力隊員として、カリブヘエコ・ツーリズムの専門家として派遣される女性と知り合った。彼女はボランティアでCCの仕事もしていたが、昼食をともにすることを求められ、私自身の20数年前のジャマイカでの体験を話しもした。その他、私にとり有益だったものに、移民の歴史、グローバリゼーション、南北格差、無農薬有機農法についての講座が浮かぶ。

ピースポート活動にたいする私自身のコミットメントとしては、航海終盤の5月3日、憲法記念日の大集会で要請され、第二次大戦時の中学生体験を中3の私の孫に伝えるという形式で、戦争を知らない世代に語りかける催しに出た。5月13日にはおなじくピースポート事務局の企画で「あの人の105日間 古川博巳」と題した催しにメインゲストとして出た。これには私の要望で、学生時代から演劇サークルにいたという船上で知り合った友人も一緒に出席してもらった。ここでも戦争中の体験をまじえて話をした。

世界遺産を含む寄港地ツアーはじめ、航海中に見た忘れられない風景は数多い。なかでも、ジャマイカ寄港2日前の夕景色は格別であった。その朝は太極拳の練習中に船尾デッキからクジラを見る幸運にめぐまれたが、夕食後の夕焼け空は見事なものであった。日没に映える雲の右手を横切って飛行機雲が一本白い糸を引いていた。上背のある外国人女性教師がデッキに出たとたん「オー・マイ・ゴッド！」と叫

んだ。前方デッキに群がっていた人たちは「日本では見られない景色ですね」など感嘆の声を交していた。

夕焼け雲は刻一刻たそがれていき、やがて高みになびくちぎれ雲を紫色に染めた。その頃にはいつのまにか、人影はほとんどなくなっていた。私は暗くなった海面をじっと見ていた。アメリカの黒人詩人ラングストン・ヒューズのこんな詩を思い浮かべながら。

神様が血を流し  
血が咳き込んで空をよぎり  
黒ぐろとした海原を真っ赤に染めた  
それがカリブ海の日没だ

この海域は「三角貿易」時代、最悪の底辺で、多くの黒人奴隷の血が流されたのだった。

この船旅は、私が歩んできた道すじや調査旅行に想いをめぐらせ、再考の機会を与えてくれた。折にふれ、戦争が奪い去った青春を取り戻した気分にもさせてくれた。

(  
黒人研究会・顧問)

アメリカの戦争と人種差別に能天気な研究者でいてよいか

須田 稔

‘05年9月8日、コリン・パウエル前国務長官がABCテレビで語った。’03年2月5日の国連安保理事会外相会議で、アメリカのイラク開戦の根拠としてサダム・フセイン政権が大量破壊兵器を保有している「証拠」を提示したことについて、「(私の)汚点だ。..ひどいものだった(心が痛む)」と(9.10『毎日』、ワシントン・吉田弘之発)。

明確に職務上の政治的責任を告白したわけでも、道義的に謝罪を表明したわけでもなく、単に心情を吐露したにすぎないが、彼の後継のコンドリーザ・ライス国務長官がいつの日か自分の過誤を告白することなどありえないネオ・コンサヴァティヴズの一人と思えるから、パウエルの良心の蘇生に救われる感がある。そして、“アメリカ黒人”の二重性を想う。

アメリカの反戦運動団体にANSWER(Act Now to Stop War and End Racism)がある。人種主義がなお根強くあることは、ハリケーン・カトリーナによる甚大な被害の起因に貧困黒人住民にたいする蔑視行政があるとの批判が噴出したこと、9月28日のラジオ番組で元教育長官ウィリアム・ベネットが「この国のすべての黒人の胎児を中絶すれば犯罪発生率は下がる」と述べたことにも明らかだ。

「二重性」を想うと書いたが、アフリカ系あるいはカリブ系のアメリカ人の両極的階層分化が進行する状況で、パウエルやライスなどに対して、とりわけ貧困黒人はアンビヴァレントな、つまり誇りと怒りの感情的葛藤に苛まれているのではないか。在日作家の金石範(キム・ソクポム)が語る言葉('05. 9.29『毎日』夕刊)の鋭い重みに注目するのだ。'02年9月17日の日朝首脳会談で金正日(キム・ジョンイル)が日本人拉致を認め謝罪したとき、「在日として、朝鮮民族の一員として生きてきた道義的根拠が一瞬にして失われた気がして。戦前、戦後を通じて被抑圧者であり、被差別者であるわれわれは、それゆえ人間的な生き方ができたわけです。それが突如、加害者に立たされてしまってね。」という言葉。

私たちも実は、戦争の被害者意識が強くて加害者の自覚が弱いのではないか。栗原貞子の詩の一節に、「〈ヒロシマ〉といえば／〈ああヒロシマ〉とやさしくは返ってこない／アジアの国々の死者たちや無告の民が／いっせいに犯されたものの怒りを／噴き出すのだ」とある。加害の追及と被害の告発、謝罪と断罪、悔悟と寛恕が、和解と友愛と連帯には欠かせないのだ。

1993年8月、細川首相が戦後初めて首相として「侵略戦争だった。間違った戦争だった」と明言したが、'05. 8.2の国会決議は「侵略の行為」も「植民地支配」も削除し、謝罪も表明せずだ。

日本人の一人として、私は、そしてあなたは、恥辱を覚えないか。この点では、アメリカ“民主帝国”政府は、日本国政府よりは人権意識が進んでいると言えるだろうか。

1997年5月、クリントン大統領は、1930年代にアラバマ州で実施されていたアフリカ系アメリカ人に対する梅毒研究のための人体実験について、国家を代表して謝罪。

1998年3月、クリントン大統領、ウガンダで、ヨーロッパ系アメリカ人による奴隷貿易の誤りを認めて謝罪。

2001年5月、アフリカ諸国、国連主催の「人種差別撤廃世界会議」準備会議で欧米諸国に対して植民地支配と奴隷貿易の被害の補償を求める姿勢を示す。

2001年9月、同上の「人種差別撤廃世界会議」、奴隷制と奴隷貿易を「人道に対する罪」と認定。

2004. 6.17、アメリカ連邦議会上院、過去にリンチを禁止する法律を制定しなかったことについて、犠牲者に謝罪する決議を採択。初めて提案された1882年から1968年までに少なくとも4742人がリンチの犠牲者。100人の上院議員のうち80人が共同提案者に連名したが、ミシシッピ州の2人は加わらず。(6.17『赤旗』)

上の最後の例を除いた5件は、「国際シンポジウムの記録」編集委員会編『「記憶」の共有を求めて PART II 「過去の克服」と真相究明 日米韓で進む歴史事実調査』(樹花舎、2002)の資料による。

研究者もまた、「恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚する」(日本国憲法前文から)のであれば、被害と加害、謝罪から和解への、断罪から友愛への道で、専門領域を生かしながら、発言し行動しなければならない。

(立命館

大学  
・  
名  
誉  
教  
授  
)

ローザ・パークスを正確に伝えているか

須田 稔

Rosa Parks さんが10月24日、老衰のため死去した。92歳だった。米国の多くのメディアがトップ・ニュースで扱い、彼女の死を悼んだという。『毎日』は10月26日付で、訃報欄に加えて、写真を含め20行7段の、ワシントン特派員吉田弘之記者による解説記事を掲載した。

気になる点が2箇所ある。①運転手に席を立って白人に譲るように求められた時、「パークスさんは『セカンドクラスの市民として扱われることに疲れているから』と断った」と書いて(『疲れて』という語の用法に齟齬がある)、他方で、「AP通信によると、

パークスさんは92年、こう回顧している。『他の乗客と同じように扱われる権利があった。私たちはあまりにも長い間、耐え続けてきた。』と書いている。②「モンゴメリー市営バス内的一幕」と書いている。

この2点に関して、A. 本田創造『アメリカ黒人の歴史 新版』(岩波新書、1991. 3)、B. V. シュローデト、P. ブラウン(松村佐知子訳)『キング牧師』(偕成社、1991. 4)、C. 辻内鏡人、中條献『キング牧師—人種の平等と人間愛を求めて』(岩波ジュニア新書、1993. 6)、D. 猿谷要『キング牧師とその時代』(NHKブックス、1994.5)の4書を見てみよう。

②についてA、C、Dは、バス会社のバスと明記するが、Bは3箇所「バス会社」と書きながら、1箇所「市のバス」(p. 63)と書いていて、まぎらわしい。

①彼女がなぜ席を譲るのを拒否したか。Aは「長時間、立ったままで働きつづけて疲れきっていたパークスは、白人用にとってある前部座席のすぐ後ろに席に腰をおろした。…運転手が…席を譲るよう命令した。…パークスは静かに、しかし、はっきりと「ノー」と答えてこれを拒絶した。」(pp. 175-176)。

Bは、「パークス夫人は疲れていました。…おそらく、長い間の服従や屈辱にたいするがまんが、限界をこえたのでしょう。」(p. 54)。「ある日、パークス夫人は、こうしたことに、がまんできなくなりました。夫人は運動家ではなく、ごくふつうの女性です。ただ足が痛くて、疲れていました。それで、席を立つことをことわると…」(p. 55)。「パークス夫人も、このような侮辱には、もううんざりでした。ずっとあとになって、この抵抗は前もって計画していたのかと聞かれて、パークス夫人はこう答えています、「いいえ、わたしは、ただ疲れていただけなの。足が痛かったんですよ」(p. 57)。

Cは、「彼女はNAACPの指導で席をゆずらなかつたのではありませんでした。ただ、社会の不正にうんざりしていたのです(p. 50)。

Dは、「ローザ・パークスはなぜ運転手の命令に背いてまで坐り続けていたのだろうか。彼女はそれほど一日の仕事で疲れ果てていたのだろうか。キングは後になって、この時の彼女の行動を『時代精神』(ツァイストガイスト)だったと述懐している」(p. 46)。

彼女は運動家ではなく、ただ疲れきっていたから席を譲らなかつたのか。アメリカで出版された文献を見てみよう。

MARTIN LUTHER KING, JR. : A DOCUMENTARY…MONTGOMERY TO MEMPHIS(1976)のAN INTERVIEW WITH ROSA PARKS(p. 25)に、The driver looked at me and asked me if I was going to stand up. I told him no, I wasn't. He

said, "If you don't stand up, I'm going to have you arrested." I told him to go on and have me arrested."...He asked "Why didn't you stand up?" I said I didn't think I should have to.

Stephen B. Oates, LET THE TRUMPET SOUND: THE LIFE OF MARTIN LUTHER KING, JR. (1982)に、She refused to move. She'd gone shopping after work, and her feet hurt. She couldn't bear the thought of having to stand all the way home. (p.65)

Sanford Wexler, AN EYEWITNESS HISTORY: THE CIVIL RIGHTS MOVEMENT (1993)に、"Well, in the first place, I had been working all day on the job. I was quite tired after spending a full day working. ...It just happened that the driver made a demand and I just didn't feel like obeying his demand."

そして、本書に、12月5日、Holt Street Baptist Churchで5000人を前にキング牧師が語った言葉がある。"There comes a time when people get tired. We are here this evening to say to those who have mistreated us so long that we are tired —tired of being segregated and humiliated, tired of being kicked about by the brutal feet of oppression."

さらに、1956年2月23日にNAACP会長Roy Wilkinsが語った言葉は、Montgomery whites claim not to be able to understand "their" Negroes. Well, I'll be glad to explain "their" Negroes are sick and tired of segregation, of the insults and mistreatment and daily humiliations. It's that simple.

こう見てくると、パークス夫人は疲れてもいたし、不当な仕打ちにうんざりもしていた、ということになる。

2005年11月7日のTIME誌にJesse L. Jackson牧師がパークス夫人の霊に寄せた謝辞がある。In her declining health, I would often visit Mrs. Parks, and once asked her the most basic question: Why did you do it? She said the inspiration for her Dignity Day in 1955 occurred three months prior, when African-American Emmett Till's murdered and disfigured body was publicly displayed for the world to see. "When I thought about Emmett Till," she told me, "I could not go to the back of the bus." Her feet never ached...Her righteous indignation literally changed the world. 足の痛みなどなかった、彼女が席を譲ろうとしなかったのは義憤があつてのことだった、とジェシー・ジャクソン牧師は言い切るのだ。

上記のAN EYEWITNESS HISTORYのp.68の記述が妥当ではないか、と思うのだ。「公民権運動の歴史書のなかには、ローザ・パークスを1日じゅう白人のために働いて足が棒になるシンプルな黒人女性と描くのもいくつかあるが、彼女は人種的正義をめざして闘うという、もっと大きな思想をじゅうぶんに自覚していた。1940年代の

おそくにNAACP支部アラバマ州会議の最初の書記に就任し、モントゴメリーでNAACP青年協議会分会を組織した。逮捕される前の夏には、労働者の組織化と反差別の訓練センターとして有名な、テネシー州モントイーグルにあるハイランダー・フォーク・スクールで異人種混合のワークショップにかよったこともある。」

先の『毎日』は、ローザ・パークス夫人を『公民権運動の母』と紹介している。そもそもこの称号を贈ったのはジェシー・ジャクソン牧師であった。1988年7月19日、アトランタでの民主党全国大会で、大統領候補であったジャクソン牧師が壇上でパークス夫人の右手をかざして、この称号で紹介したのだ。

10月31日付『毎日』は、パークス夫人の棺が30日夜ワシントンの連邦議会議事堂に到着、31日朝まで一般公開されると伝え、これは「アメリカでは最上級の敬意の表明で、故ケネディ、レーガン両大統領など過去29人しか例がなく、女性は初めてで、黒人は2人目」という。ブッシュ大統領夫妻が花輪を捧げて功績を讃えたとも。前日30日はバス・ボイコット闘争の地アラバマ州モントゴメリーで追悼式が行われ、バス・ボイコット闘争(1955. 12.5—1956. 12.21)の前年1954年にアラバマ州で生まれたライス国務長官も参列、「パークスさんがいなければ今日、国務長官としてこの場に立てなかったかもしれない」と人種差別政策撤廃に果たしたパークス夫人の功績をたたえた」とも。

無法で凶悪なイラク戦争を断行している大統領と国務長官の賛辞を、パークス夫人が喜ぶはずがない。アメリカ国内政策で人種主義が今なお克服されていないとき、軍産複合体が石油支配と兵器産業の利潤めあての戦争と占領を続ける時、自由・平等・平和は無残に砕かれてしまうのだ。ジャクソン師はパークス夫人を讃えて”She was never abrasive. She united us all with peace and perseverance.”という。ライス国務長官などとは対極の生きかたを貫いたのだ。

10月24日付TIME誌に、VIVIAN MALONE JONESが63歳で死去したと報じられた。彼女は、当時の知事ジョージ・ウォーレスに代表される差別主義勢力の執拗な妨害に屈せず、ケネディ大統領と連邦軍の援護を受けて、1963年6月11日、アラバマ大学にジェームズ・フッドとともに入学、1965年この大学最初のアフリカ系アメリカ人卒業生となった人。1986年に元知事ウォーレスから謝罪を受けた。1965年、SelmaからMontgomeryへの行進のあと、3月19日、投票権法案が議会に上程され、8月3日、下院は328対74、翌4日、上院は79対18で成立、8月6日調印式にジョンソン大統領はMartin Luther King Jr. ,Roy Wilkins, James FarmerとRosa Parks, Vivian Maloneを招待したのであった。



(立命館大学・名誉教授)

(順不同)

## 訃 報

### オーガスト・ウィルソン

劇作家オーガスト・ウィルソン(August Wilson)が10月2日、シアトル市内の病院で肝臓がんで死去。60歳だった。ウィルソンは、1945年にピッツバーグ市に生まれ、80年代半ばから主に故郷を舞台に黒人の苦悩の歴史を年代記風に描いた戯曲を書いてきた。コメディ Fences は1987年度の劇作部門ピューリッツァー賞を受賞し、ブロードウェイ公演でトニー賞も受ける。The Piano Lesson で2度目のピューリッツァー賞を受け、その作品群は高く評価された。

### ローザ・パークス

「公民権運動の母」と呼ばれたローザ・パークス(Rosa Parks)が、10月24日、老衰のためデトロイトの自宅で死去。92歳だった。南部アラバマ州の生まれで、1955年12月、同州モントゴメリーでバスに乗車帰宅中に白人に席を譲るよう運転手に命じられたが拒否、逮捕された。この事件に対し、地元の教会のマーティン・ルーサー・キング牧師が抗議のバス・ボイコットを呼びかけ、1年後にバス車内の人種隔離は違憲の判決を勝ち取る。この運動がきっかけで黒人解放運動が全米に広がり、64年に公民権法が制定される。パークスは生前にも教科書に取り上げられたり、議会金メダル(1999年)を受けた。彼女の棺は30日夜、連邦議会議事堂のドーム下の広間に安置された。遺体が議事堂に安置されたのは史上30人目で、女性では初めてのことだという。

(作成:古川 博  
巳)

海外のメディアから

プリンストン大学のコーネル・ウェストがハリケーン・カトリーナの災害に関して『オブザーバー』紙に寄せたコメント

## **Exiles from a city and from a nation by Cornel West**

The Observer (September 11, 2005)

It takes something as big as Hurricane Katrina and the misery we saw among the poor black people of New Orleans to get America to focus on race and poverty. It happens about once every 30 or 40 years.

What we saw unfold in the days after the hurricane was the most naked manifestation of conservative social policy towards the poor, where the message for decades has been: 'You are on your own'. Well, they really were on their own for five days in that Superdome, and it was Darwinism in action – the survival of the fittest. People said: 'It looks like something out of the Third World.' Well, New Orleans was Third World long before the hurricane.

It's not just Katrina, it's povertina. People were quick to call them refugees because they looked as if they were from another country. They are. Exiles in America. Their humanity had been rendered invisible so they were never given high priority when the well-to-do got out and the helicopters came for the few. Almost everyone stuck on rooftops, in the shelters, and dying by the side of the road was poor black.

In the end George Bush has to take responsibility. When [the rapper] Kanye West said the President does not care about black people, he was right, although the effects of his policies are different from what goes on in his soul. You have to distinguish between a racist intent and the racist consequences of his policies. Bush is still a 'frat boy', making jokes and trying to please everyone while the Neanderthals behind him push him more to the right.

Poverty has increased for the last four or five years. A million more Americans became poor last year, even as the super-wealthy became much richer. So where is the trickle-down, the equality of opportunity? Healthcare and education and the social safety net being ripped away – and that flawed structure was nowhere more evident than in a place such as New Orleans, 68 per cent black. The average adult income in some parishes of the city is under \$8,000 (£4,350) a year. The average national income is \$33,000, though for African-Americans it is about \$24,000. It has one of the highest city murder rates in the US. From slave ships to the Superdome was not that big a journey.

New Orleans has always been a city that lived on the edge. The white blues man himself, Tennessee Williams, had it down in *A Streetcar Named Desire* – with Elysian Fields and cemeteries and the quest for paradise. When you live so close to death, behind the levees, you live more intensely, sexually, gastronomically, psychologically. Louis Armstrong came out of that unbelievable cultural breakthrough unprecedented in the history of American civilisation. The rural blues, the urban jazz. It is the tragi-comic lyricism that gives you the courage to get through the darkest storm. Charlie Parker would have killed somebody if he had not blown his horn. The history of black people in America is one of unbelievable resilience in the face of crushing white supremacist powers.

This kind of dignity in your struggle cuts both ways, though, because it does not mobilise a collective uprising against the elites. That was the Black Panther movement. You probably need both. There would have been no Panthers without jazz. If I had been of Martin Luther King's generation I would never have gone to Harvard or Princeton.

They shot brother Martin dead like a dog in 1968 when the mobilisation of the black poor was just getting started. At least one of his surviving legacies was the quadrupling in the size of the black middle class. But Oprah [Winfrey] the billionaire and the black judges and chief executives and movie stars do not mean equality, or even equality of opportunity yet. Black faces in high places does not mean racism is over. Condoleezza Rice has sold her soul.

Now the black bourgeoisie have an even heavier obligation to fight for the 33 per cent of black children living in poverty – and to alleviate the spiritual crisis of hopelessness among young black men.

Bush talks about God, but he has forgotten the point of prophetic Christianity is compassion and justice for those who have least. Hip-hop has the anger that comes out of post-industrial, free-market America, but it lacks the progressiveness that produces organisations that will threaten the status quo. There has not been a giant since King, someone prepared to die and create an insurgency where many are prepared to die to upset the corporate elite. The Democrats are spineless.

There is the danger of nihilism and in the Superdome around the fourth day, there it was – husbands held at gunpoint while their wives were raped, someone stomped to death, people throwing themselves off the mezzanine floor, dozens of bodies.

It was a war of all against all – 'you're on your own' – in the centre of the American empire. But now that the aid is pouring in, vital as it is, do not confuse charity with justice. I'm not asking for a revolution, I am asking for reform. A Marshall Plan for the South could be the first step.

\* Dr Cornel West is professor of African American studies and religion at Princeton University.

\* Interview by Joanna Walters, in Princeton, New Jersey

## 入 会 者

土屋和代氏

東京大学大学院博士課程を修了し、現在カリフォルニア大学サンディエゴ校歴史学部大学院博士課程に在籍しております、土屋和代と申します。第二次世界大戦後のアメリカの都市・福祉政策における人種・ジェンダーをめぐる問題について研究をしております、南カリフォルニア(主としてロサンゼルス地域)の黒人居住区の歴史に特に関心をもっております。どうぞよろしく願いたします。

## 退 会 者

大森載和氏が2004年度をもって退会されました。  
伊藤堅二氏が2004年度をもって退会されました。  
多田加代子氏が2004年度をもって退会されました。

(順不同)

## 会 員 消 息

西本あづさ氏

岩瀬由佳氏

(順不同)

## Coda～編集後記にかえて

2005年最後の日の新聞に、映画『男たちの大和』に兵隊の役で出演した俳優が「戦死者のおかげで今の平和があることを実感し、その気持ちを他の人たちにも伝えたい」という趣旨の発言をしたとありました。この映画を観たわけではありませんので輕輕に意見を述べるべきではないのかもしれませんが、「戦死者のおかげで」という部分に何かすっきりしないものが残りました。昨年(2004年)、議員連盟「教育基本法改正促進委員会」の設立にあたり、ある国会議員が「国の為に命を投げ出しても構わない日本人を生み出す」ことを目標とするような発言をしたことも思い出しました。いま映画化されて評判になっている童話も、狼が自らの命と引き換えに友達の羊を救うおはなしです。以前、大学の授業でDavid H. Hwang の戯曲M. Butterfly についての感想を書いたら、何人かの学生が劇中劇でマダム・バタフライが自害する場面について「理由はどうあれ、愛した人のために命を捨てられるのはすごい」という意味のことを書いていたこともありました。

命の尊さについて反論するのは難しいことですが、「命がけで」何かを守ろうとすること、「なにかのために死ぬ」ことに異議を唱えることもそう簡単ではありません。全ての文脈から切り離されたところで「命がけで～を守る」ということに少なからぬ人々が賛同しているときはなおさらそうです。この国の現在は「今、ここ」という(矮小化されたマルクス思想のパロディのような)視野狭窄状況を呈していて、自分の棲む閉じた小さな領域の外でなにが起こっているのか、昔なにがあったのかについてほとんど関心を持たないように感じられるのは杞憂に過ぎないのでしょうか。

Until lions have their own historians, tales of the hunt will always glorify the hunter.

- Igbo proverb



今回も拡大紙面となりました。投稿くださった、黒人研究という分野を文字通り切り開いてこられたお二方の健筆ぶりからは研究者としての確乎としたお姿が目につかぶようです。

会員の皆様からの原稿をお待ちしております。ご協力のほどどうぞよろしくお願いいたします。

<編集> 黒人研究会・編集部  
〒608-8577 京都市北区等持院北町56-1  
立命館大学国際関係学部・加藤恒彦研究室気付

<編集者> 鉄井孝司